

特集

# 未来へ託す

## メッセージ

戦後75年の今、

戦争の記憶を語り継ぐ

戦争中における防空演習風景  
(昭和18年・安来町)  
(写真引用：市制50周年記念写真集)

昭和20年8月15日の終戦から今年で75年。時を重ね、戦争の出来事や当時の思いを語る体験者が少なくなり、忘れてはならない戦争を次の世代にどう語り継いでいくのか課題となっています。

今号では、戦争体験者や遺族の皆さんが語る戦争の記憶、安来で実際にあった事実を通じて「未来へ託すメッセージ」を考えます。

多くの人が臨時召集兵で出征  
(昭和19年・安来駅)  
(写真引用：市制50周年記念写真集)



## 陸軍少年飛行兵だった

出征兵士見送り、村葬に参加

昭和12年布部小学校2年生の時、日中戦争が起きました。しばらくすると、同級生のお父さんが召集令状で出征。残された子は、寂しさのあまり学校で泣くこともありました。戦時下では、次から次へと召集令状が届きます。私達は手作りの日の丸の小旗を振って、出征兵士を見送りました。当時、児童が300人以上、村人も総出で盛大な見送りをした記憶があります。

戦争が激しくなると戦死された人もいました。小学校の講堂



まさみ  
細田暢三さん (92)

で村葬が行われ、私たち小学生も参列。クラリネットで「君が代」、「海行かば」、「安らかに」を吹奏し、英霊(※)のご冥福をお祈りしました。

※戦死者の魂を敬つていう語。

### 戦時教育は心身鍛錬

教育は戦時教育になり、厳しく教えられました。

4年生に進級した4月、新任の先生が担任になりましたが、その先生は、すぐに軍隊訓練を受けるため松江の歩兵63連隊に入隊。8月末に除隊になった2学期から再び教壇に立ちました。若いのと軍隊帰りのため、授業はとても厳しく教えられた

▶少年飛行兵の募集チラシ、ポスター。(細田さん所有)

気がします。

中でも大変だったのは、体操の授業。1年中、上半身裸で受けていました。夏はともかく、冬は寒くて大変でした。校庭に雪が積もる中、はだしでかけ足。小学校の隣に要害山という岩山があり、そこまでは登り降りしました。歩いてではなく走って降りるため、足の裏が痛くなり、仙人の荒行のようでした。

学校の日課で時刻を知らせる時、用務員のおばさんが鐘を鳴らして知らせていましたが、ラッパの合図で行動するように



なりました。

当時の心身鍛錬を強化する教育は、軍事教育そのものでした。





▲少年飛行兵時代の細田さん、当時 14 歳。

### 志願して少年飛行兵に

戦時体制に入ると少年兵を募集するポスターが街頭に張られ、学校にもありました。低学年の頃は「勇ましい兵隊さんだなあ」と見ていたと思います。高学年になると、「国はお前から若い者を待っている。日本男児は必ず兵役がある。少年兵として若い時から行っておけば特典がある」などと、子どもだましのようなことを言われた記憶があります。

しかし、当時の子どもは本気で聞いていました。この頃には軍国少年になりきっていました。高等小学校卒業前（現在の中学校2年生）になると、進路

指導があり、当時は今とは違い、国策に沿った指導です。「国が求める部所に進ませる」これを強く指導していました。そのため面倒なことを考えず、当然のように私も少年兵を志願し、そして少年飛行兵を受験しました。その結果少年飛行兵になりましたが、1年5カ月の訓練中に戦争は終わりました。

### 次の世代に伝えたい

戦争を知らない人へ戦争体験者が語ることに意味があります。軍事教育が何であったかと戦争を知っている我々が話すことは、今大事なことだと思っています。

### 未来につなぐ

#### 平和のバトン

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止しましたが、毎年、市では「戦没者追悼式」、「平和のつどい」を行っています。

#### 戦没者追悼式

戦争は、多くの犠牲者が生まれます。安来でも多くの若者が兵士として戦地に赴き、命を落としました。遺族や関係者を招き犠牲者の冥福を祈る追悼式を行い、戦争の惨禍を後世に伝えていきます。

#### 平和のつどい

市は1市2町が合併して10周年となる平成26年に「非核平和都市宣言」を制定しました。この宣言に基づき、市民



▲昨年度の「戦没者追悼式」の様子。毎年6月にアルテピアで開催。



▲昨年度の「平和のつどい」の様子。戦後70年を迎えた平成27年から、毎年9月に開催しています。

の平和意識の向上を図ることを目的に、平成27年度から「平和のつどい」を布部交流センターと加納美術館を主会場に開催しています。平和を願い続けた画家、加納莞菫ゆかりの地である布部で開催され、恒久平和の思いを次の世代につなぐセレモニーとなっています。



5周年の節目となった昨年度は、市内外から寄せられた2500個のあんどんを布部ふれあい体育館に並べ、広島市の平和記念公園から採火した火をともしました。また、劇団「幻影舞台」が加納莞菫の人生を描いた演劇を披露。布部小学校の児童も出演しました。

## 父が残してくれたもの

### 親子をつなぐ軍事郵便

私の名前「康夫」は、出兵中の父が付けてくれたものです。私が生まれる4カ月前の昭和16年12月8日に、日本は戦争を始めました。これが昭和20年8月まで続く太平洋戦争です。

私の父は海軍の訓練を受けていたため、昭和16年12月16日に招集令状を受け、亀嵩駅から広島島の軍港へ出兵。そして戦争が始まり9日目に、広島宇品港から軍艦に乗りました。

父の出兵時、私は母親のお腹にいました。その翌年3月に、生まれました。出兵中だった父が送ってくれた軍事郵便で、私



山脇康夫さん (78)

の名前は付けられました。手紙には「男の子なら『康夫』、女の子なら『陽子』と名付けてください」と記してありました。この父からの手紙のことはとても記憶に残っていて、私は結婚して、女の子が生まれると迷わず「陽子」と名前を付けました。お前の名前は、おじいさんが付けてくれたのだとのちに話をしました。

### 父を亡くし、残された家族

昭和17年11月11日、インド洋上で父は戦死しました。乗組員

350名を乗せた船「報国丸」は、敵潜水艦から魚雷攻撃を受け撃沈。戦死者76名の中に父の名前もありました。年齢29歳、私が生後8カ月目のことです。

働き手の父が戦死したため、我が家の生活は大変だったと思います。当時は、50代の祖父母夫婦と20代の母、幼い私の4人家族。あのころの姑さんは、厳しさがありません。

母は、私を連れて実家へ帰ったことが幾度かありました。けんかも派手に、祖母とよく張り合っていました。一方、2人から「父親が居れば、ここまで張り合うことは無かっただろう」と私はよく聞かれました。母は再婚せず、一家3人を抱えて頑張ってくれたと思います。

ところが祖母が亡くなると、母の状況がおかしくなり、病院への入退院を一年間繰り返すこともありました。張り合いが無くなったからだと思います。

この家庭環境では、私の進路は決まりです。高等学校の進学は難しく、中学で就職組です。先生の勧めで県外に就職予定でしたが、祖母の猛反対で断念。

卒業式が終わっても、私1人が無職の日々でした。1週間後、担任の先生に紹介され、町内の事業所に就職が決まりました。

### 父を感じる唯一の写真

手元には、父の写真と私の生後100日目の写真があります。私は父を知りませんし、父も私を知りません。肉親と感じるのはお互いの写真です。

平和になって75年になります。私も78歳になりました。6人の孫に囲まれています。これからも平和な日本が続くことを願ってやみません。戦争は二度と繰り返されてはなりません。その思いをこめています。



▶生後100日の康夫さん(右)と父 芳之助さん(左)。



## 平和な未来に向けて

戦後75年。戦争体験者や遺族の人に直接お話を聴くことが難しくなりつつあります。

過去は変えられませんが、未来は自分たちで築くことができます。身近なお年寄りから体験談を聴いたり、平和のイベントに参加したり、できることから始めてみませんか。

平和な未来に向けて、次世代へメッセージを託すのは私たちです。

## 図書館歴史講座

## 「安来探訪」講演会開催

開催日：8月1日（土） 13:30～15:30

会場：和鋼博物館映像ホール

演題：「昭和20年夏の空と海」～ふるさと安来の戦争～

講師：大原歳之氏（伯耆文化研究会会員）

定員：36人（申し込みが必要です）

その他：新型コロナウイルス感染予防のためマスクの着用をお願いします。

## 安来市加納美術館だより

## 「戦後75年 いま安来から世界へ」

加納莞菴<sup>かんらい</sup>が求め続けた恒久平和

戦後75年という節目の今年。加納美術館では世界の恒久平和をこの安来から世界に訴え続けた加納莞菴の活動を紹介する特別展を開催しています。

加納莞菴は、戦後の1949年から画家としての

活動を中断して、フィリピン戦犯の助命を求める活動を始めます。

1953年に戦犯が許された後も、世界の平和を求める活動を続けました。

この展覧会では、映像やパネル、本人の日記やキリノ大

統領やローマ教皇など世界の要人に向けた手紙のファ

イルを展示し、活動の全体をご覧いただけます。

また、莞菴の油絵や書などの作品も多く展示しています。

## 【同時開催】

▼小企画展「備前焼名品展」

問い合わせ

加納美術館

☎ 36・0880

※美術館の様子を

加納美術館公式

フェイスブック

(FB)で公開しています。



▶フィリピン前大統領エルピディオ・キリノ（右）と握手を交す加納莞菴（左）



▲「紫陽花」 ©加納莞菴

◀「愛」 ©加納莞菴



※新型コロナウイルスの状況によって休館になることがあります。詳しくは、加納美術館ホームページをご覧ください。問い合わせください。